優秀賞
小学生の部

男女平等

則武小学校 4年　中村　羽舞

「男にうまれたかった？女にうまれたかった？」と、友達に聞かれました。わたしは、なやみました。男の方が気楽そうだけど、女の方がかわいい服着ておしゃれできるからです。女の人は大人になったら家事をやらなきゃいけないからいやだけど、赤ちゃんを産めるのは女の人だけです。だから、どちらがいいかなやみました。

最近ニュースで、大学の不正入しの事をやっていました。よく分からなかったので、お母さんに聞くと、女の人のテストの点数を下げて不合かくにして、ぎゃくに男の人の点数が悪いのに合かくにしたりしたそうです。テレビに出ていた人は、

「女の人は結こんや出産で仕事をやめるかくりつが高いから男にゆずればいい。」

と、言っていました。一生けん命勉強して、ゆめをかなえるためにがんばっていたのに、

そんな理由で不合かくになる事があるなんて、許せません。男女平等という言葉を聞くけれど、全然平等じゃないじゃん！と思いました。

私の家では、ごはんを作ったり、せんたく・そうじをするのは全部お母さんです。お母さんは、仕事から帰ってきて休む時間なく働いています。そして、お父さんが帰って来るとごはんをならべます。食べた後のかた付けも、もちろんお母さんです。お父さんは帰って来たらごはんを食べて、ビールを飲んで、ぐーたらしています。私はお父さんに、

「なんでお皿かたづけないの?!」

と、言いました。お父さんは、

「男はいいんだ！」

と言いました。私はお父さんの考えはまちがってると思います。大昔の人みたいです。ださいです。

お母さんも、私には「手伝って」を言うのに、お父さんには言いません。　私は、お母さんもお父さんにしっかり言うべきだし、お父さんももっとお母さんの事を手伝ってあげるべきだと思います。そうしたら女の人も楽になって仕事をやめる事なく男の人のようにたくさん働けるのになあと思いました。

この前かぜをひいて病院に行った時、男の人が名前をよびました。私は先生かな？と思いました。でも本当は先生じゃなくて、かんごしさんでした。私は、かんごしさんは女の人というイメージをもっていたので、びっくりしました。少しへんな気持ちになりました。でも、この作文を書きながら、私も男女差別の気持ちをもってしまっていたんだと気付きました。知らないうちに、男の仕事、女の仕事と差別していました。

一年生のころけんばんハーモニカを買う時もそうです。私は、本当は青色のけんばんハーモニカがほしかったのに、お母さんに、

「青色は男の子の色だから、女の子はピンク色だよ。」

と、言われました。私も、

「やっぱりそうかなあ。」

と、結局ピンク色に決めました。周りの女の子もピンク色が多かったです。お母さんも、私も、周りの子も、自然にピンクは女の子の色だとイメージをもっていて、差別していたんだなあと思いました。

お母さんが子供のころとは、だいぶ変わったと言っていたけど、まだまだ男女差別はあります。男だからこうしなさい、とか、女だからこうしないと、とか関係なく、自分に出来る事、自分のしたい事をする事が大切だと思います。私もみんなもせい別を気にすることなく、今まで持っていた意しきを変えて、本当の男女平等な社会になっていくとうれしいです。

優秀賞
小学生の部

人権について

茜部小学校　5年　伊藤　蒼生

人権について考えたとき、障がいがある人とふつうの人はどんなちがいがあるのだろうと思いました。

ぼくには身体障がいがあります。だから今、足にそうぐをつけて学校に行っています。学校では、ほかの人と差別を受けずに、みんなと協力をしてすごしています。

学校では、自分が少しこまっていると、友達がすぐ助けてくれます。

そのほかにも、学校の先生がひなんくんれんの時に、自分が身体障がいがあるので先生が自分を守ろうとしてくれたのでうれしかったです。

ぼくはお父さんと弟に自分のことを聞いてみたら「ふつうのお兄ちゃん」と言ってくれたのでよかったです。お父さんに聞いてみると「学校に歩いて行っているし、体育もちゃんとやるのですごい」と言ってくれました。

ぼくは、家族が身体障がいのないふつうの子と同じように感じてくれているのがうれしかったです。

では、ぼくとふつうの子はどこかちがうのだろうと考えたとき、そうぐをつけているところかなと思いました。学校には毎日そうぐをつけて通っているので、どうしてつけているのとか、どうしてそうなっているのかを百回ぐらい聞かれました。そのたびに、少しめんどくさいと思うときもあるけど、ぼくのことを無視されるのもいやなので、いつも答えています。

人と見た目がちがうことは、ぼくに身体障がいがあることをすぐに気づいてもらえて助けてもらえることも多いけれど、いつも同じことを話さなくてはいけないというめんどくさいところでもあります。でも友だちは一度話せばふつうの友だちと同じように遊んでくれるのでよかったです。

でも、一度がっかりしたことがあります。まだ遊ぶ友だちが少なかったころに、勇気をだしてドッジボールに入れてもらおうと声をかけたときに、仲間に入れなかったことがありました。ぼくはそのときは勇気をふりしぼって言ってみたけど、ことわられたのでとてもがっかりしました。でもその後に、入れなかった理由を聞いて安心しました。自分たちより年上の人たちもいてあぶなかったので、けがをしたらたいへんだという理由でした。最初は仲間はずれにされたと思ったけれど、ぼくを思っての行動だったので、その気持ちがうれしかったです。

このように、障がいがあっても、まわりとぼくがおたがいの気持ちを理かいして協力すれば、ぼくのように差別とか人権とはなんだろうかと考えなくても、楽しく毎日をすごせるので、障がいのある人とふつうの人のちがいを気にするのではなく、みんなで助けあって思いやりをもって生活することが大事なのだと思います。

いつも助けられているぼくだけど、こまっている人がいたら、助けてあげられる人になりたいと思います。

優秀賞
中学生の部

ヘルプマークを知っていますか

鶯谷中学校　1年　森田　悠斗

　ヘルプマーク、聞きなれない言葉ですが、助けて欲しいとかヘルプが必要なマークではないか？と予想はできます。学校でも以前、少し学習したので知識として残っています。しかし、実際に街の中でヘルプマークを着けている方を見かけたときに何が出来るだろうか？ぼくに出来ることは？と考えたとき、言葉として少しの知識はあるのに関わり方が分からない自分に気がつきました。

　そこで、実際の認知度が低いヘルプマークの理解をもっと広げたいと思い、この作文を書きました。

　ごく一般的な優先席は、高齢者や幼児、そして妊娠中の方や足等に障がいを持つ方が優先的に座る席。それはとても判り易く表示されているし、対象の人も判別し易いので電車等で遭遇した場合にも、僕はちゅうちょ無く席をお譲りすることができます。

　さて、ヘルプマークとは、義足や人工関節を利用している方、内部障がいや難病の方、妊娠初期の方など、援助や配慮を必要としている方々がかばん等に付けることで、周囲の方に手助けを必要としていることや、「見えない障がい」への理解を求めるものです。

　僕の母は今年の春に内臓の病を患い、今は闘病中です。治療による副作用が酷いので、自動車を運転することもままならず、父や祖父に頼るか公共の交通機関を使わなくてはならなくなりました。そこで、ヘルプマークが必要になったのです。母いわく、見えない障がいというのはとても厄介なのだそうです。堂々と優先席に座る勇気がもてず、また体の中のことは誰も気付いてくれないため、世間の見られ方を気にするあまり、辛くても立っていなくてはならないこともあると言っています。

　僕がヘルプマークを取得して変わったことはないか聞いてみると、

「ヘルプマークの認知度が低いから気付いて声を掛けて下さることはめったに無いけれど気持ちの上で楽になったよ！外出先で困らないお守りみたいなマークかな」

と答えてくれました。とても明るく嬉しそうだったので、僕も嬉しくなりました。

　母は病気になって、今までごく普通で当たり前に出来ていたことが出来ないと泣いたそうです。僕は今、母の体調が悪いとき、何を必要としているか聞いて出来る限り家事の手伝いをしています。学校のお弁当も、負担にならないよう購買を利用するから大丈夫だと伝えています。

　こうしたことは相手が母であり、家族で病気のことも分かっているから出来ることだけれど、一歩外へ出れば、母が病人であることは誰も知らない訳だから、不安だらけで、一人で外出などしたくないだろうと思います。

でも、母に限らず外から見えない障がいがある方々も大手を振って外出する権利があるはずです。病気の陰に隠れて一歩が踏み出せないでいたら、気持ちが折れて病気にも負けてしまうのではないだろうかと思うのです。

そう思った時、健常者の僕たちが出来ることがはっきりしてきました。

㊀　電車内や公共の場で席をゆずる。

㊁　困っているようであれば声をかける。

この二点は常識の範囲としてみんなが共通理解したいです。そして、僕たちの出来て当たり前は、ヘルプマークを持っている方にとっては違うことをしっかり意識したいと思います。

　体調が悪くて三歩先の物が取れずにいるかもしれません。自分の携帯で救急車を呼ぶことすら出来ずにいるかもしれません。荷物を網棚に置くことが出来ずにいるかもしれません。言葉にしたくても大きな声が出せないかもしれません。

　助けの言葉を待ってから行動するのではなく状況を判断し、自分の方から

「何かお手伝い出来る事はありませんか？」と声をかけることがとても大切だと気がつきました。そこで僕はこれからは、この一言から始めてみようと思います。

　小学校のとき、僕の学校は挨拶運動に力を入れていました。クラスの仲間や先生だけでなく、学校全体で取り組み、地域の方や登校時のボランティアの方々にも大きな声と笑顔で挨拶をすると、初めての人もニッコリと笑って挨拶のお返しをしてくれました。僕はそのお返しが大好きでした。

「何かお手伝い出来る事はありませんか？」言葉は違うけれど、感覚的には同じ事なので、臆する事なく始めようと思います。きっとお互いの心が豊かになると思います。そして、一人でも多くの人にヘルプマークへの理解と協力をお願いしていこうと考えています。

優秀賞
中学生の部

個性が輝く世界へ

岐阜清流中学校　3年　武内　望紗稀

私は、中学校に入学する前、ある悩みがあった。それは、制服でスカートをはかなければいけないことだ。私はスカートが嫌いで、小学校低学年頃からずっとズボンをはいてきた。髪の毛も短めで、外でよく遊び、ボーイッシュな服を着てきたため、スカートをはくことに抵抗があったのだ。ズボンでもいいのになと思ったことを今でも覚えている。女子の制服はスカート、男子はズボンというのは当たり前であり、昔から続いているものである。しかし最近、女子大学生がパンツスーツで就職活動をしている姿を見かける。また、昔は男女を色で分けていた学校の体操服が全員同じものを着用することが多くなってきた。このように、現代は男女が同じように生活し、過ごすことが多くなってきた。

それに反して、制服のように男女の違いがみられるものにスポーツがある。国技である相撲は、土俵には男性しか入ることができず、女人禁制となっている。男はよくて女はだめだという男女で格差があるため、これからも議論されていく話題なのだろう。一方、私は剣道をやっているが、胴着は男女で同じものを着用している。それは他の武道でも同じだ。男女が変わらず競技を行い、平等にスポーツをすることが増えてきている。

さらに、職業にも変化が出てきている。昔は、結婚すると女性は専業主婦になり、男性が働くことは常識であったが、今では共働きの世帯が増加している。また、男性の仕事だと思いがちな警察署や自衛隊は女性も働く人が多くみられる。時代の変化に伴い、男女の違いがだんだんなくなってきたのだ。私が学校で生活していても、そのように感じることがいくつもある。例えば、中学校の生徒会長を女子生徒がやっていたり、応援団長も女子生徒がやっていたりする。リーダーは男子が務めるものだという考えは古く、男女が同じように平等に生きることが現代の考えなのだと思う。昔からこうだからという固定観念があっては、今を生きることは難しく、新しい考えをつくっていくことが人間の平等にもつながっていくと思う。

世界にも目を向けると、男女の平等はここ数年、考えられてきた。国のトップである首相や大統領は女性がなることもあり、議員に女性がなることは当たり前になってきた。世界では、男女平等に力を入れている国もあり、日本はまだまだ追いついていない。誰もが同じように活躍できれば、思ってもいないことが浮かんだり、違った考えが出てくるかもしれない。視野を広げられることはとても大切であり、人が平等になることでそれは実現していくのではないだろうか。

しかし、先日、ある大学が入試の点数を減らして女子の合格者を抑制していたことが分かった。男女間の平等を進めていく世の中で、男女を差別するこの問題は考え直さないといけない問題だ。そして、女子の合格者を抑制した理由が、女性医師は結婚や出産で職場を離れたり、深夜勤務が出来なくなったりするからということだった。女性は仕事上で支障がでるという差別がこの問題を引き起こしたのである。女性が育児休暇をとるということは理解すべきことであると思うし、今や男性でも主夫、イクメンといった家事を行う時代になってきた。全員が同じ人間として平等にとらえれば、男女間の差別はなくなることだろう。しかし、どうしても人間は、短所をとらえがちであり、それが目立ってしまう。でも、改善案を考え、それをどう補っていくかを考えることが、解決への一歩につながるだろう。

日本は今、男女平等を目指し、さまざまな改革が行われている。しかし、日本はまだまだ遅れているほうだ。これからの未来を担うのは私たち若い世代であり、その中には女性も男性もいろいろな人が関わっていく。どんな人でも一人一人のよさがあり、それをのばしたり、活かしたりすることが人権を尊重し、平等に生きることにつながると思う。みんなが同じように生活できることは、何より幸せで明るくなるにちがいない。だれもが意見をもち、それを言い合える世界は、男女が平等になることから始まるのではないだろうか。